２．「大学との連携で行う名古屋大学教育学部附属中・高等学校の高大接続型学力形成」

前名古屋大学教育学部附属中・高等学校副校長、名古屋大学非常勤講師
山田　孝

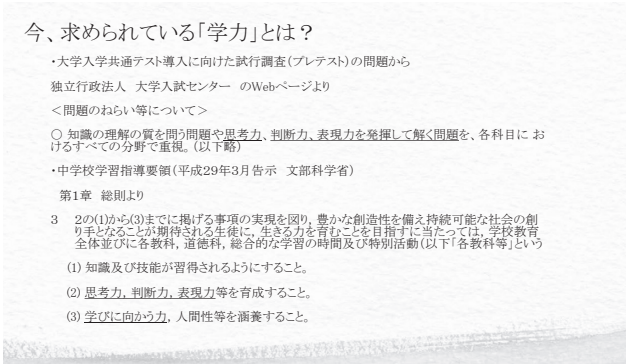
はじめに

皆さん、こんにちは。名古屋大学教育学部附属中・高等学校の前副校長の山田です。今は名古屋大学と名古屋市立大学の、基本的には教職課程、教員養成の非常勤講師を務めています。

なぜ私が今日この場所にいるかというと、実は、名古屋大学教育学部附属中・高等学校は、全国中高一貫教育研究会の会長校であり、事務局校でもありますが、ちょうど１年前のこの時期に、名古屋大学教育学部附属中・高等学校で全国中高一貫教育研究会を開催し、そのときに、次回は２月３日に大阪能勢高校で全国中高一貫研究会を開催することを私が決めました。ですから、現職の校長と副校長は、本日はその研究会に行っております。その結果、私が責任を取って、今日この場に立っています。

そういう関係で、私は前職でありますが、名古屋大学教育学部附属中・高等学校の高大接続型学力形成ということで、名大附属では総合的な学習の時間を「総合人間科」と言っていますが、その説明を中心にお話ししたいと思います。それから、高校の先生方も多くいらっしゃるようですが、私は今、大学で教職課程の学生を教えるというスタンスですので、高校の先生方とは問題意識が少し変わっています。申し訳ありませんが、大変失礼な話をするかもしれません。

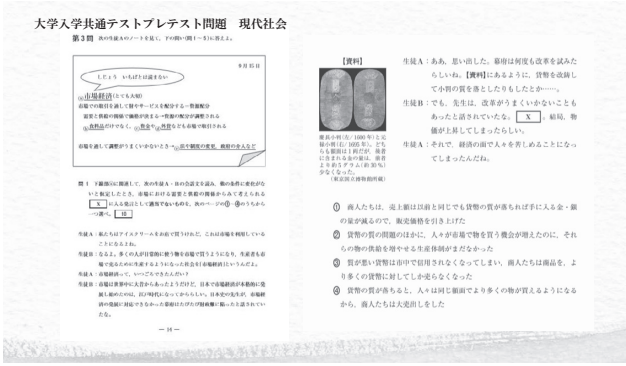
１．今、求められている「学力」とは？



私は教職を目指している大学生に社会科教育法や生徒指導論、それから特別活動論を教えているのですが、どういう学力が今後求められているのかということを大学生と一緒に考えています。その中で、今回の大学共通テストのプレテスト、つまりそれを導入するため試験問題で、その問題作成の狙いが、思考力、判断力、表現力を発揮して解く問題ということでつくられているところに、非常に関心があります。

それから、中学の学習指導要領も発表され、さらに解説版まで出ていますが、その総則の中では、どんな学力を形成するかということについて「知識および技能が習得されるようにすること」

「思考力、判断力、表現力等を育成すること」、それから「学びに向かう力、人間性などが今後求められる」ということが書かれています。こういうことを踏まえて、どういった問題や話題が取り入れられているのかを見てみました。



大学入学共通テストプレテスト問題　現代社会

第3問　次の生徒Aのノートを見て、下の問い（問1～5）に答えよ。

9月15日

もしかして　いちばん上は誰もいない

①市場経済（とても大切）
市場での取引を通して財やサービスを配分する→資源配分
需要と供給の相互作用で価格が決まる→資源が配分が調整される
②希少品だけでなく、③財全体や④財でなくても市場で取引される
市場を通して調整がうまくいかないとき→⑤政府の変更、規制のかたちで

問1　下線部(1)に関連して、次の生徒A・Bの会話文を読み、後の条件に変化がないと仮定したとき、市場における需要と供給の関係からみて考えられる X に入る文はどれか。次のページの①～④のうちから一つ選べ。 ほ

生徒A：最近ちまたでイチゴケーキをよく買うけれど、これは市場を利用しているってことになるよね。
生徒B：なるほど。多くの人が目安箱に従う物を市場で買うようになり、生産者も市場で売るものの生産するようになったわけだ市場経済というんだよ。
生徒A：市場経済って、いつごろできたんだい？
生徒B：市場は世界中に大昔からあったようだけど、日本で市場経済が本格的に発展し始めたのは、江戸時代になってからだろな。日本史の先生が、市場経済の発展に対応できなかった幕府はたびたび「倹約令」を出したと話されていたな。

— 14 —

【資料】

東北小判（左／1600年）と元禄小判（右／1695年）。どちらも額面は1両だが、後者に含まれる金の量は、前者よりおよそ2グラム（約35％）少なくなった。
（東京国立博物館所蔵）

生徒A：ああ、思い出した。幕府は何度も改革を試みたらしいね。【資料】にあるように、貨幣を改鋳して小判の質を落としたりもしたとか……。
生徒B：でも、先生は、改革がうまくいかないこともあったと話されていたな。 X 、結局、物価が上昇してしまったらしい。
生徒A：それで、経済の面で人々を苦しめることになってしまったんだね。

① 商人たちは、売上額は以前と同じでも貨幣の質が落ちれば手に入る金・銀の量が減るので、販売価格を引き上げた
② 貨幣の質の問題のほかに、人々が市場で物を買う機会が増えたのに、それらの物の供給を増やせる生産体制がまだなかった
③ 質が悪い貨幣は市中で信用されなくなってしまい、商人たちは商品を、より多くの貨幣に対してしか売らなくなった
④ 貨幣の質が落ちると、人々は同じ額面でより多くの物が買えるようになるから、商人たちは大売出しをした

大学共通テスト・プレテストで、現代社会の問題があります。なぜ現代社会かというと、高校の学習指導要領の改訂で現代社会がなくなってしまうので、少し寂しいですが、たまたま今教えている大学生が市場価格の模擬授業をやっていまして、市場価格について見てみようかということでこの問題を取り上げました。

問題のつくり方などは、私は専門ではないので詳しくは説明できないのですが、この問題では、研究発表するので、自分や友達同士で調べてみましたといった、友達との会話形式の中で問題文が作成されています。これを学生と読んだときに、大学３年生は、「これって読解力じゃない？」という感想を持ちました。書いてある内容をしっかり理解していないと、これが正しいのか間違っているのか分からないので、「かなり読解力がいる問題じゃないの？」というような感想を持っていました。

なぜこういう例を挙げたかといいますと、配布資料の後ろのほうに名大附属の中学受検の問題を載せていますが、名大附属の入試改革をしたときに、こういうような形式の問題を作っていたからです。友達と夏休みの課題に取り組んでいて、その課題は何々で、というようなやり取りを追いながら問題を解いていくという入試問題をつくったことがあります。そのことを思い出して、配布資料の最後に参考として載せました。

平成３０年度のセンターテストにも「判断力」を問う問題が出題される

2018年

教育

ムーミンの設問 良問？ 根拠弱い？

大学入試センター試験 議論続く

判断力を問う出題

北欧の国を問う問題

フィンランドの

もう１つ、これは、今回のセンター試験の地理で出た、ムーミンの問題です。私は結構意欲的な問題だと思いました。ただ、これも私は専門ではないのであまり詳しいことは言えないのですが、ムーミン谷はどこにあるのかというのはなかなか難しい問題です。「ムーミンの作者はどこの出身か」というぐらいにしておけば一番良かったのかなと思うのですが、ただ、やはり考えさせる問題です。

少し見えにくいですが、「現代の問題というのは解答のないものに取り組むのだ」と、この記事の中に尾木直樹氏[1]がコメントを書いています。「だから、こういう問題はいいのではないのか。ただ、本当に答えがないのは困るが、こういった解答のないことに取り組んでいくのがこれからの課題ではないのか」と、尾木直樹氏はこの問題を評価しています。私もこういう問題はいいのではないのかなとは、個人的には思っています。

それから、面白いのは海外の評価です。海外ではどういうふうに評価されているかといいますと、この問題の出来が合否につながるということについてです。これは２点か３点の問題ですが、それで合否が決まってくることに対する違和感について書かれています。

今回の高大接続改革の目的の１つは、１点刻みの合否についてどうなのかという反省ですから、今回、センター試験の地理でのムーミンの問題が出た事件も、少し考えさせるかなと思います。こういうことが私の関心事項であり、それを軸にして、発表の内容を考えてみました。

２．少し長い自己紹介

担当学年　分掌　研究関係の取り組み

1989年　平成元年　高校2年副担任　生徒部　前年度より「学校改革」が続く
※学校の教育目標を決定

☆1995年　平成7年　高校2年担任6　研究部　特設教科「総合人間科」開始　研究開発1期3年
研究主題「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる教育課程の開発－
『総合人間科』設置の試み」

1998年　平成10年　高校3年担任9　研究部
☆中学校学習指導要領（「総合的な学習の時間」）平成10年12月告示
平成14年より全面施行

1999年　平成11年　高校2年担任10　研究部　中高一貫ワーキンググループの座長となる
☆高等学校学習指導要領（「総合的な学習の時間」）平成11年3月告示
平成15年4月より学年進行で施行

☆この年、学校訪問が急増　500人近くが訪れる

□2000年　平成12年　高校3年担任11　研究部　併設型中高一貫校となる　研究開発2期6年
研究主題「高大の連携を活かした『青年期のキャリア形成』－総合的学習の
発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発」

名大附属という学校は中等教育を担う学校です。３つぐらい前の校長先生が「まっとうな中等教育をやる」とよく口にされていました。また、教育実習校でもあるし、研究開発校でもあります。教育実習といっても、年に２回、前期と後期、合わせて50人ほどの実習生が来るぐらいですので、他の教員養成の附属学校に比べれば少ないほうです。研究開発校としては、私が附属学校に勤務していた28年は、ほぼずっと何らかの研究開発に取り組んでいました。

昭和63年ぐらいに附属学校の学校改革が始まっていました。平成元年前後ぐらいに愛知県で複合選抜が導入され、そして私立の推薦入試等が始まるということもあり、当時の附属学校の先生方が「学校改革をしないといけない」「入試改革をしないいけない」と、大変危機感を持たれたのが、

[1] 尾木直樹　日本の教育評論家。法政大学特任教授。臨床教育研究所「虹」所長。『尾木ママ』の愛称で知られる。

昭和62年、63年ぐらいの時です。

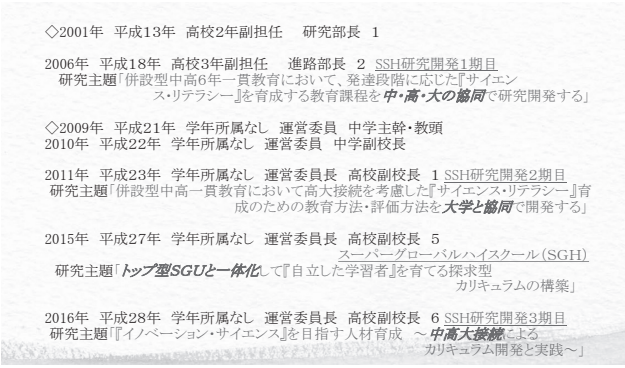
私は平成元年、いわゆる昭和64年、その学校改革の最後ぐらいに附属学校に着任しました。その学校改革の怒涛の中に巻き込まれて、最初は訳が分からないまま過ぎていきました。附属学校としてどうやって生き残っていくかということで、教育の方針を決めることになり、附属学校としての教育理念を「国際理解と平和の教育」としました。今では国際理解教育は当たり前になってきていると思うのですが、この平成元年前後から、附属学校は国際理解、平和教育をこれまでずっとやっていました。

古い資料を調べてみると、「平和探究クラブ」というのがあったようです。クラブ活動として平和学習をやっている先生がいたのですね。そういうような伝統がありまして、かなり職員会議で揉めた記憶がありますが、「国際理解と平和の教育」を附属学校のテーマにして取り組んでいくことを平成元年に決めました。

先ほども言いましたが、国立の附属学校は研究開発学校ですので、分掌として研究部があります。総合人間科が始まると同時に、私は研究部に移り、その研究開発を推進していくことになります。そして、３年間、研究部で研究開発を推進し、その後に何をやるかということになり、附属学校を中高一貫校にすることにしました。

平成10年ごろに法改正があり、中高一貫校が法的に認められてきましたので、その中で名大附属も中高一貫校になろうということで、平成10年に大学の教育学部と協同で中高一貫校の理念を定め、平成11年からワーキンググループをつくって中高一貫カリキュラムをつくりました。たまたまその中高一貫カリキュラムのワーキンググループの５人のメンバーのひとりに私が選ばれて、さらにその中で座長になって、この中高一貫カリキュラムをつくることになりました。それが平成11年です。

そして、平成12年にカリキュラムを完成させて、平成12年から正式な中高一貫校となって現在に至ります。さらに、先ほど言いましたが、全国の中高一貫研究会の会長校、事務局校を現在も担っております。



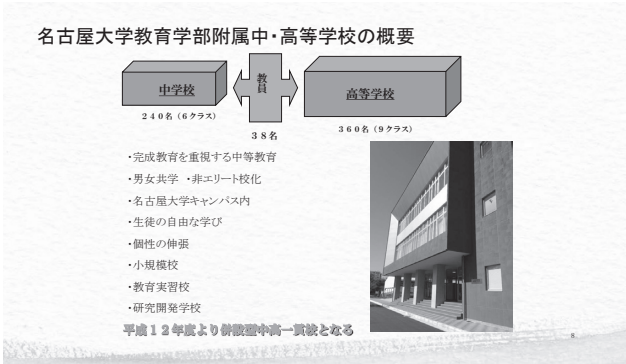
2001年（平成13年）に研究部長に就任しました。附属学校の大変良いシステムだと思うのですが、こういった役職は選挙で決めます。選挙で決まってしまうと断れないので、研究部長を４年やりました。中高一貫の研究開発を６年やり、その後、同じ役職は４年で御役御免ということなので４年で解放されて、次は進路部長になって進路指導をやっていくのですが、その進路部長２

年目のときにSSHの研究開発第１期目に取り組みます。このあたりも中・高・大というのがキーワードでしたので、中・高・大協同で研究開発をしました。この研究開発の２年目に、研究部にもう一回戻って研究部長をやって、研究開発の中間報告を書きました。それが、ありがたいことに高い評価をいただいたので、SSHの２期を迎えることができました。それが2011年（平成23年）で２期目です。さらにこの年に高校の副校長になりました。何が面白いかといえば、何も面白いことはありません。

やはり教員は、担任を持ったり、学年に入って生徒と一緒に勉強したりするのが楽しいのですが、副校長になると授業を持つなと言われました。私の専門は世界史なので、本当は高３の世界史をやりたいのですが、持たせてくれませんでした。いろいろと忙しくて、どこかに急に呼び出されることがあり、それによって穴をあけることが多くなるので授業を持つことが出来ませんでした。細々と持っていたのはSSHの授業や、誰もやらないテキストのない特設授業で、SSHの科学倫理等について授業を行っていました。

とにかく、学校の管理運営者は、所属学年もありませんし、総合人間科もやりません。全教員で総合人間科に取り組むのですが、副校長はその中に入れませんでしたので、とても寂しかったです。そういうことを説明するために、これまで長い自己紹介をいたしました。

３．名古屋大学教育学部附属中・高等学校の概要



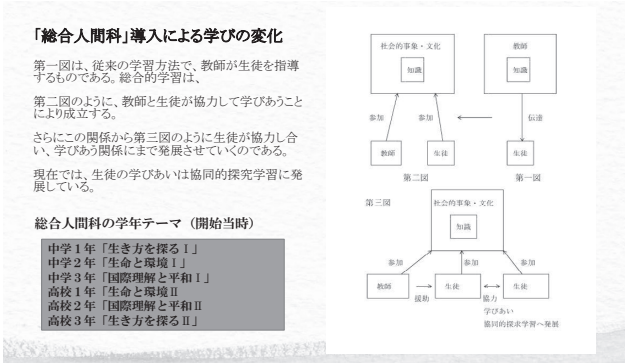
では、次に名大附属はどういうところかについてお話しします。中学校は１学年に２クラスで、定員は１クラス40名です。男子20名、女子20名と定員が決まっています。この定員を充足させないといけません。中学校は３学年で６クラスです。高校から１クラス分入学してきますので、１学年３クラスになります。こういう形式の中高一貫校を「併設型の中高一貫校」といいます。これはまた後でキーワードになります。完全な中高６ヵ年一貫校を「中等教育学校」といい、現在、国立の附属学校では４校あります。東京大学教育学部附属中等教育学校、東京学芸大学附属国際中等学校、奈良女子大学附属中等教育学校、神戸大学附属中等教育学校です。併設型は、国立では名古屋大学教育学部附属中・高等学校の１校しかありません。

基本的には、完成教育を目指す中等教育で、男女共学、非エリート校です。それから、最大のメリットは、名古屋大学のキャンパスの中にあるということです。東山キャンパスの西の端に鏡ヶ池という池がありますが、その向かいにあります。４年ぐらい前に大規模な校舎改修をしました

ので、大変きれいになっています。アベノミクスだったか何かで急に予算が付いたので、１年で大改修しました。

それから、生徒の自由な学び、個性の伸長、そして小規模校であります。中学・高校を合わせても600名ぐらいの学校です。先ほど言いましたが、教育実習校であり、研究開発学校でもあります。そういった利点を生かしながら、平成12年に併設型中高一貫校となって、今年で18年になります。

４.「総合人間科」導入による学びの変化



もう一回話を戻しますが、高大連携でつくってきた学びの１つが「総合人間科」です。これは総合的な学習の時間の先駆けになるものです。今は、総合的な学習の時間をどの学校でもやられているかと思いますが、名大附属では平成７年に文部科学省に申請し、研究開発学校ということで取り組み始めました。

総合人間科とはどういうものかといいますと、各学年で「学年テーマ」を設定し、そのテーマに基づいて生徒が自ら課題を見つけ、それを１年間かけて調査をし、発表し、まとめます。つまり、総合的な学習として、そのテーマに従って１年間、生徒一人一人が自分の学びを追究していくということです。

学年テーマは、学校生活、中等教育の入り口として中学校１年生は「生き方を探る」としています。６ヶ年かけてどういう進路を探していくかという、入り口だからです。中学２年生は「生命と環境Ⅰ」、中学３年生は「国際理解と平和Ⅰ」です。名大附属では、修学旅行ではなくて研究旅行といっていますが、中学３年生の研究旅行で広島に行きますので、学年テーマは「国際理解と平和」です。学校の教育理念も「国際理解と平和の教育」ですので、それにもリンクしています。

高校１年生から１クラス増えますので、もう一回ここでテーマのやり直しをします。高校から入ってきた子にも取り組みやすい「生命と環境」という学年テーマを高校１年生に置き、高校２年生は沖縄に研究旅行に行くので、「国際理解と平和」としています。先ほど言いましたが、昭和63年頃に始まった学校改革で、教育の方針を決めることになり、附属学校としての教育理念を「国際理解と平和の教育」としました。これに繋がっています。

教科を超え、学年のテーマを決めた授業を各学年でも１つ作ったらどうかということを、研究

グループで相談をしました。附属学校は、今はSSH等に取り組んでいますので、SSHの中の課題で研究グループをつくって、１年間研究しています。平成元年の当時は、特にそういった研究開発をやっていませんでしたが、教員が研究グループを作り、その研究内容を発表して、学年や学校の取り組みを行っていくことをやっていました。

たまたま私が属していた研究グループでは、小委員会というのをつくって、学年のテーマを決め､その学年の先生でオリジナルの授業をつくりましょうという内容のものがありました。また、そのときに第３委員会で「脱教科」というグループをつくっており、そこに私も属していましたので、その脱教科のグループの中で各学年のテーマを決めようということになりました。中１が性教育、中２がいじめと差別、中３が平和と核問題、高１が環境問題、高２が戦争と平和、高３が自分史・職業または職業なし、というような各学年のテーマを、平成元年に決めていました。これは頓挫して、結局実現はされませんでしたが、こういうバックグラウンドがありましたので、これが総合人間科をつくるときの学年テーマに反映されたのかなと思います。

とにかく総合人間科では、この学年テーマに従って、生徒一人一人が自分で学びたいテーマを決め、１年間かけて調べていきます。調べるときも、できるだけ専門の先生に話を聞きましょう、必ずフィールドワークをやりましょうということで、フィールドワークを入れます。フィールドワークは、今はいろいろな課題があって一斉に実施することはしていませんが、11月の何週目という日に決めて、その日に一斉にフィールドワークに行くということをしていました。一斉に学校から出て、専門の先生などに話を聞きに行くわけです。

そして、そのフィールドワークから戻ってきたら、発表会を必ず行います。その後、最後は報告書をまとめます。ですから、中１から高３まで６年やりますと、総合人間科の報告書が６冊できるということになります。これは附属学校の図書館に全部保管してあります。

私が総合人間科の説明をするときにいつも思っていたのは、１周遅れで先頭に立ってしまったのかなということです。名大附属は、ほそぼそと総合的な学習に昭和40年代から取り組んでいました。私が平成元年に着任したときに覚えているのは、教員の持ち時間を決めるときに、大体１人15時間、16時間決めていくのですが、その中で、総合学習は２人でやりたい、つまり１つの授業を２人で担当するということでした。今ならチームティーチングは当たり前になっているかもしれませんが、当時は１つの教科を２人で担当するということに大変違和感がありました。しかしそれが総合学習だったのだと実感しています。

昭和40年ぐらいから総合学習に取り組み、平成７年からは総合人間科ということで、本格的に取り組み始め、それがその次の学習指導要領改訂で「総合的な学習の時間」ということで取り上げられていくわけです。ほそぼそとやっていたことが取り上げられて、１周遅れで先頭になった感があって、長い自己紹介の中にも書いておきましたが、400名を超える学校訪問があった時期があります。ちょうど指導要領が公示されるあたりに一気に学校訪問が増え、１年間で400～500人近くが来校しました。知らない間に先頭を走っているような気持ちになったのですが、今、こうやって総合学習の歴史を調べてみると、実は先頭を行き過ぎて１周早く先に行っていて、最後追い抜いて先頭に立ってしまったかなというのが最近の実感です。

総合人間科は生徒に知識を伝達するということではなく、教師はあくまでもコーディネーターです。教師が教えるのではなく､生徒が自発的に学び､さらに協力し合い､学び合います。これが、

現在の附属学校の協同的探究学習という学習形態です。これは、東京大学の藤村宣之先生が提唱されている１つの学習形態であり、現在、全国に広がりつつあると思いますが、それを今、発展的にやっています。

あまり自慢できることはないのですが、少し自慢なのは、『「総合人間科」導入による学びの変化』のスライドの中の第一図と第二図は佐伯胖氏の本から取りましたが、第三図は実は自分で考えました。最近、『今求められる学力と学びとは』に、この第三図によく似た図がありました。ちなみに、私がこの図を書いたのは1997年ですので、私が真似たのではありません。大体考えることは、みんな同じなのかなと思っています。

生徒が課題を見つけ、その中の問題を発見し、それに取り組んで解決していくという学習形態を、総合人間科の中で取り組んできました。学年テーマを決め、この学年に学部の先生方が１人ずつ張り付いて、１年間協同で取り組むという形式をとり、大学と連携をしながら総合人間科を進めていきました。

どういう理念で総合人間科を開発したのか、どういう問題意識で開発したかというと、この当時考えたのは、遅れがちな生徒に対応する新しい教科の開発でした。それが特設教科「総合人間科」ということになるのですが、どういう生徒が遅れがちになるのかということについて、その当時３点考えました。

・偏差値に代表される一定の価値観にとらわれ、自己評価に自信を失い、人生の将来展望に希望を失いがちになっている。
・理解力が学校内、教科書の内容にとどまり、自己とそれを取り巻く社会・自然との関わりの関心が乏しく、問題意識が希薄である。
・自ら問題を解決したり、今まで学んだ知識や経験を生かして自己表現をしたり問題解決したりすることに不慣れである。

以上が、学習が遅れがちになっている子どもではないかという生徒観で、これを克服するために総合人間科という教科をつくって、自分たちで課題を見つけ、調べ、解決していくという学習形態を始めたわけです。

総合人間科開発当時には３つの特徴があります。これは今も生きているわけですが、「３つの脱」ということで、１つ目は「脱教科」です。現代の課題を学ぶために教科の枠を超える、教師の狭い専門性を脱ぎ捨てるということです。これは、先ほど見ましたが、平成元年に脱教科の委員会をつくって考えたことが背景になっています。

それから、「脱教室」です。地域社会に出掛ける、専門家や担当者から直接話を聞くというようなフィールドワークの実施は、今も取り組んでいます。フィールドワークは重要な作業と、今でも認識してやっています。

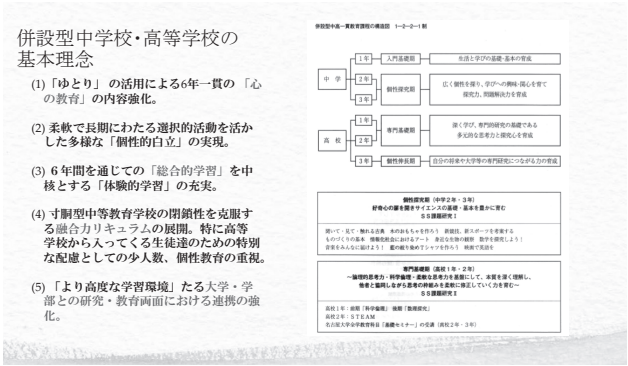
そして「脱偏差値」です。知的関心の形成、問題解決能力、コミュニケーション、表現する力、実践力などで多元的・総合的に生徒を見ていきます。一言で言ってしまえば、生徒を偏差値だけで判断しないということです。名大附属の受験指導は偏差値で行くところを振り分けるような指導ではなく、できるだけ生徒の希望を尊重しながら、その希望が実現できるような生徒指導に力

を注いでおります。こういった考え方は、今見ても決して古いものではないのではないか、今でも通用するのではないかということで、最初に「今求められている『学力』」を挙げさせていただきました。

平成７年から９年までの３年間、文部科学省の研究開発で総合人間科に取り組み、大学との連携のもとに発展させていったわけですが、附属学校としては非常に自信を持ってこの総合人間科に取り組むことができました。生徒も変わっていきます。主体的に勉強をします。もともと大学の附属ということでかなり自由な雰囲気はありましたが、またこれを機に、自由に深く学べる、さらに大学をフィールドにしながら学ぶということが確立していきます。一番身近なフィールドワーク先は名古屋大学ですので、名古屋大学にフィールドワークに出掛けるということになります。

少し前に、附属中学校１年生が益川先生[2]のところに電話をかけました。非常に便利なのです。あまり大きい声で言えませんが、内線があるので、内線で回すと研究室に電話がかかるのです。そうしたら、たまたま益川先生ご本人が出て、「じゃあ来てください」ということになり、先生のところへ行って、生徒が質問しました。それをまた学校で発表したりします。そういった、もっと学んでいく、大学をフィールドにするという伝統ができました。

５．併設型中学校・高等学校の基本理念

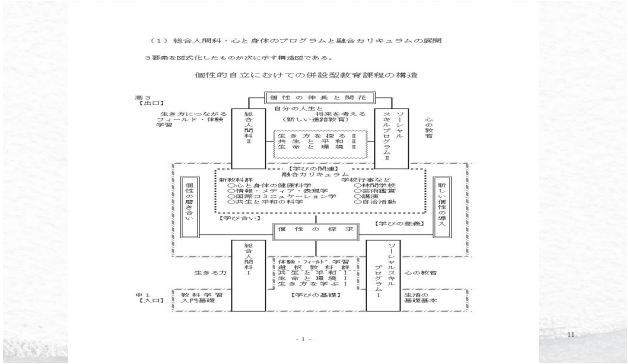


総合人間科をベースに、併設型中高一貫教育課程を１・２・２・１制としています。併設型ですので、高校から１クラス分の生徒が新しく入学してきます。完全な中高一貫、いわゆる２･２･２ではなくて、中１を１、中２・中３を２、高１・高２を２、そして高３を１として、区切りよくしています。この１・２・２・１制は、現在もこのまま続いています。元校長の安彦先生[3]の中等教育理論を基にして、中高一貫を組み立てました。

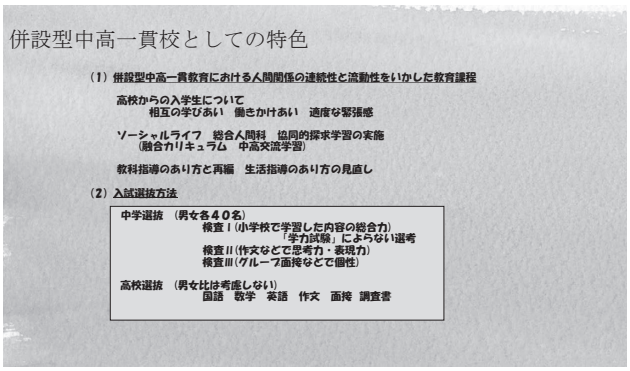
---

[2] 益川敏英　日本の理論物理学者。専門は素粒子理論。名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構長・特別教授、京都大学名誉教授、京都産業大学益川塾教授・塾頭。2008年にノーベル物理学賞を受賞。

[3] 安彦忠彦　日本の教育学者。名古屋大学名誉教授。専攻は主に中等教育の教育課程（カリキュラム）論を中心に、教育方法、教育評価。

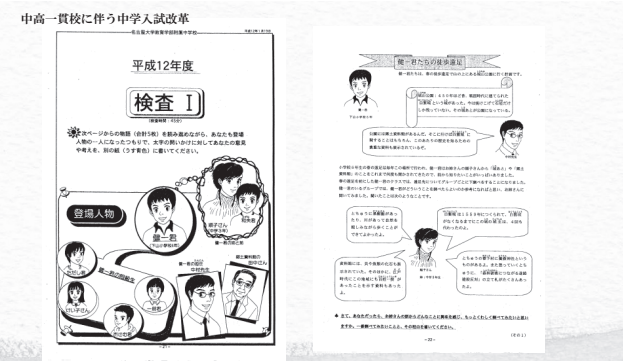


６．併設型中高一貫校としての特色



あとは中高一貫の理念像、それから中高一貫校の特色についてお話しします。併設型の中高一貫校ですから、中学から入学した子は６年間ですが、高校から入学した子も無理なく溶け込めるように、高校１年生に融合カリキュラムを作りました。その融合カリキュラムは、現在はSSHやSGHの高校１年生、２年生の取り組みになっています。

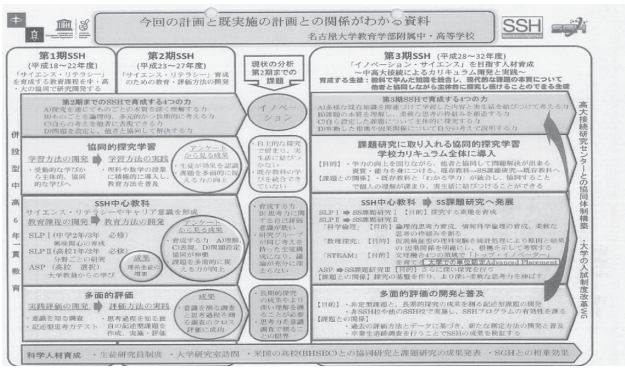
また平成12年に入試改革を行いまして、現在、中学入試は検査Ⅰ、検査Ⅱ、検査Ⅲを実施しています。これらの３つの検査で､総合的に合否を判断しています。この入試改革でつくったのが、最初にお話ししましたが、友達同士で夏休みの課題に取り組み、その中で問題を解いていくというような形式の問題でした。こういうものを平成12年から入試問題として取り入れています。

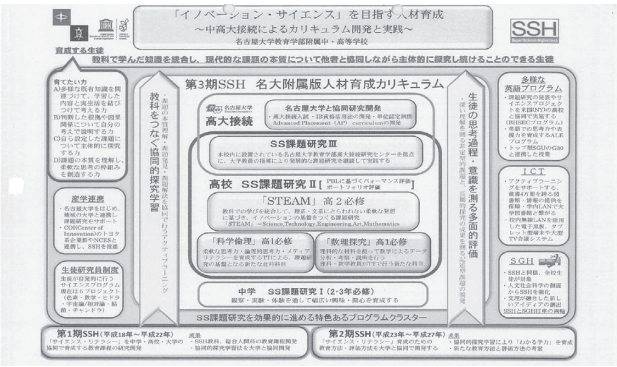


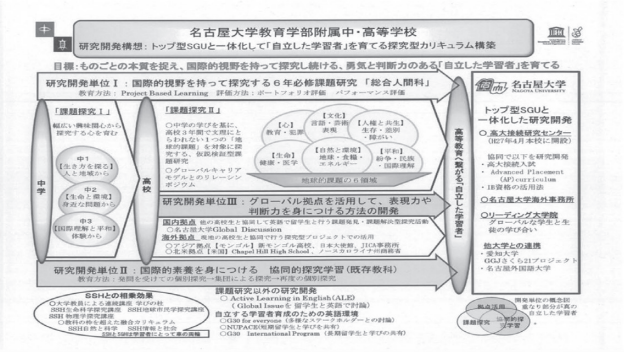
大学との連携では、ソーシャルスキルを学ぶということで、ソーシャルライフの実践が本になった「教室で学ぶ『社会の中の人間行動』」という新しく、そして少し道徳的な教科をつくって、中高一貫カリキュラムで取り組んでおります。

吉田研究室と共同で開発したソーシャルライフの実践が本になった

あと、現在、SSHの３期目に取り組んでいます。これが最新の３期SSHの理念図（次ページの図）で、特色としては、サイエンス、自然科学だけではなくて、人文科学、社会科学もSSHの中でやる、さらにアートもやるというのが現在取り組んでいるSSHで、来週金曜日、名大附属で発表会をやります。それから、スーパーグローバルハイスクール（SGH）も取り組んでいます。







あと、今、総合人間科の本を書いています。うまくすれば2019年ぐらいに出るかもしれません。ただ今、鋭意執筆中です。

最後、少しはしょりましたが、大学と連携しながら深い学び、今で言うとアクティブ・ラーニングということになると思うのですが、そういった学びを総合人間科の中でつくりながら現在に至っています。

少し時間をオーバーしました。また何かあれば、どこかで説明したいと思います。ご清聴、どうもありがとうございました。